『東京大学言語学論集』37 (2016.9) 315-328

現代フランス語と現代イタリア語の接続法の比較

—イタリア語の接続法の特質とフランス語の接続法回避について—

佐野夕香
vitarosea@gmail.com

キーワード：フランス語　イタリア語　接続法　接続法半過去　従属節　文体論

要旨

現代フランス語と現代イタリア語では接続法の出現文脈に少なからず差があると言われている。その事実を具体的に検証することは可能であろうか。本論文では、接続法という形態カテゴリーを持たない現代日本語で書かれた文学作品のフランス語訳とイタリア語訳を比較して、双方における用例を集め、構文による分類を行い、接続法の出現数を比較した。特にイタリア語訳で接続法が使われていて、フランス語訳で使われていない例に着目し、イタリア語の接続法の特質とフランス語における接続法回避の方策を明らかにした。

1.　はじめに

ロマンス諸語の叙法の１つである接続法はラテン語から継承された叙法であり、直説法が現実を客観的に提示する叙法とされるのに対して、接続法は現実に対する主観的な判断や非現実を表す。ところが現代のフランス語とイタリア語では、それらを表す叙法が異なる場合があり、イタリア語での接続法での表現が、対応するフランス語文では直説法や条件法である事例が多く存在する。

イタリアでは、ルネサンス期にPietro Bembo (1470-1547) などの主張によって14世紀のフィレンツェ語を模範とした言語の統一が推し進められた[1]。このことによって、現代イタリア語は、他のロマンス諸語と比べても、より古典的な要素を色濃く残している。現に現代イタリア語で接続法であるのに現代フランス語では直説法が選択される表現では、かつてはフランス語でも接続法の使用が可能であった[2]。

本論文では、フランス語とイタリア語の接続法の特徴を考察するために、現代語で書かれた文学作品において比較を行う。口語で接続法半過去が使われることのなくなった現代フランス語と比べて、現在も日常会話において接続法半過去が使われているイタリア語の方が、文語・口語とも接続法の使用が多いことが予想されるが、実例によってそれを検証する。

本論文では、日常会話よりも接続法の使用が多いと思われる文学作品での比較を試みる。フランス語で書かれた文学作品とそのイタリア語訳、イタリア語で書かれた文学作品とそのフラ

1　Bruni (2007: 79-99).
2　Von Wartburg (1962:105-106).

ンス語訳の対照に関しては、両言語に接続法が存在する以上、オリジナルの言語のテキストの影響を訳文が強く受けてしまう可能性がある。そこで、原語のテキストに干渉されない、より自然な表現や叙法の選択という観点から、接続法を持たない非印欧語である現代日本語で書かれた文学作品のフランス語訳とイタリア語訳の叙法の違いを比較する。

テキストは、現代語で書かれていて、フランス語、イタリア語への訳出が比較的新しいものとして、次の作品を使用する。

① 村上春樹 (1987)『ノルウェイの森』：pp. 5-154. 東京：講談社

・フランス語訳 Murakami, Haruki (2007) Makino-Fayolle, Rose-Marie 訳, *La ballade de l'impossible*, pp. 7-135. Paris: Belfond.

・イタリア語訳 Murakami, Haruki (2013) Amitrano, Giorgio 訳, *Norwegian Wood Tokyo Blues,* pp. 3-112. Torino: Einaudi.

接続法の使用が、訳者の個性に左右されてしまうおそれもあるので、同じ村上作品で訳者が異なり、『ノルウェイの森』と同様に、語り手が一人称単数である以下の作品も使用する。

② 村上春樹 (2005)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド（新装版）』：pp. 9-126. 東京：新潮社.

・フランス語訳 Murakami, Haruki (2013) Atlan, Corinne 訳, *La fin des temps,* pp. 9-131. Paris: Seuil Points.

・イタリア語 Murakami, Haruki (2002) Pastore, Antonietta 訳, *La fine del mondo e il paese delle meraviglie*, pp. 5-102. Torino: Einaudi.

最後に、現代の話し言葉においての接続法の使用を観察するために、なるべく日常普段話す言葉で演劇を作るという「現代口語演劇理論」を提唱している平田オリザの次の戯曲も使用する。

③ 平田オリザ (2007)『東京ノート』東京：早川書房.

・フランス語訳 Hirata, Oriza (1998) Makino-Fayolle, Rose-Marie 訳, *Tokyo Notes*. Besançon: Les Solitaires Intempestifs.

・イタリア語訳 Hirata, Oriza (2002上演) Botta, Chiara 訳, *Tokyo Notes*. Roma: Teatro Vascello.

以上の現代日本語で書かれた、村上春樹の２作品（両作品とも10万字程度）と、平田オリザの戯曲の１作品のフランス語訳、イタリア語訳を比較する。（以下、①を『ノルウェイ』と、②を『世界の終り』と、③を『東京ノート』と、フランス語例文を fr、イタリア語例文を it と

表す。）

2. 従属節における接続法の分類と分析

先に挙げた３作品のフランス語訳、イタリア語訳には、従属節における接続法は、『ノルウェイ』において347回、『世界の終り』において359回、『東京ノート』において138回、計844回出現したが、うちフランス語が157回でイタリア語が687回と、両言語の接続法の使用頻度にかなりの差があることが判明した。この844の接続法をフランス語とイタリア語の比較において、構文による分類を次のように行った。

I　フランス語訳、イタリア語訳とも接続法になる。
I. 1 フランス語訳とイタリア語訳の構文が同じである。
I. 2 フランス語訳とイタリア語訳では構文が異なる。

II　イタリア語訳では接続法であるが、フランス語訳では接続法にならない。
II. 1 フランス語訳とイタリア語訳の構文が同じである。
II. 2 フランス語訳とイタリア語訳では構文が異なる。
II. 2-a イタリア語訳の主節あるいは従属節が、フランス語訳で現れない。
II. 2-a-i イタリア語訳の主節が、フランス語訳で現れない。
II. 2-a-ii イタリア語訳の従属節が、フランス語訳では現れない。
II. 2-b フランス語訳で不定詞構文になる。
II. 2-c フランス語訳で動詞が名詞化される。
II. 2-d フランス語訳で分詞を用いた構文になる。
II. 2-e フランス語訳で重文、または二つ以上の文になる。

III　フランス語訳では接続法であるが、イタリア語訳では接続法にならない。
III. 1 フランス語訳とイタリア語訳の構文が同じである。
III. 2 フランス語訳とイタリア語訳では構文が異なる。
III. 2-a フランス語訳の主節あるいは従属節が、イタリア語訳で現れない。
III. 2-a-i フランス語訳の主節が、イタリア語訳では現れない。
III. 2-a-ii フランス語訳の従属節が、イタリア語訳では現れない。
III. 2-b イタリア語訳で不定詞構文になる。
III. 2-c イタリア語訳で動詞が名詞化される。
III. 2-d イタリア語訳で分詞を用いた構文になる。
III. 2-e イタリア語訳で重文、または二つ以上の文になる。

以上の分類に基づく接続法の出現数は表１のとおりである。

表１　『ノルウェイの森』、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、『東京ノート』のフランス語訳とイタリア語訳に出現する接続法の回数

I　仏(接)∧伊(接)		ノルウェイ	世界の終り	東京ノート	計
構文同じ	I. 1	27	44	10	81
構文異なる	I. 2	8	5	0	13
	計	35	49	10	94

II　仏(−)∧伊(接)					
構文同じ	II. 1	127	95	54	276
構文異なる	II. 2	122	142	53	317
主節無	II. 2-a-i	42	44	25	111
従属節無	II. 2-a-ii	8	29	10	47
不定詞構文	II. 2-b	36	43	12	91
名詞化	II. 2-c	15	11	5	31
分詞	II. 2-d	14	8	1	23
重文	II. 2-e	7	7	0	14
	計	249	237	107	593

III　仏(接)∧伊(−)					
構文同じ	III. 1	2	0	0	2
構文異なる	III. 2	26	24	11	61
主節無	III. 2-a-i	5	5	10	20
従属節無	III. 2-a-ii	10	12	0	22
不定詞構文	III. 2-b	10	5	1	16
名詞化	III. 2-c	0	0	0	0
分詞	III. 2-d	0	0	0	0
重文	III. 2-e	1	2	0	3
	計	28	24	11	63

合計	312	310	128	750

接続法　延べ回数				
フランス語	63	73	21	157
イタリア語	284	286	117	687
合計	347	359	138	844

これら844の接続法から適宜例をとって、両言語の振る舞いの違いを明らかにしていく。

3.　現代日本語のイタリア語訳文の接続法について

本論文における文学作品の訳文における接続法の数から、フランス語訳では接続法が使われていないのに、イタリア語訳では接続法を使用しているケースは全体の79%にも及ぶ。このことからイタリア語ではフランス語と比べて、かなり積極的に接続法を使用していることが理解

される。では、日本語のイタリア語訳で使われている接続法にはどのような特徴があるのだろうか。

3.1　日本語のモダリティの訳として使用される接続法

日本語の文は、事態を述べる部分と、事態の捉え方を表すモダリティの部分の２つの部分に分かれることが多い。日本語には様々なモダリティが存在し、用例の幅も広いが、ロマンス諸語における接続法が主観的な判断や不確実な要素を表すため、日本語の認識様態などのモダリティを表すのに、接続法の主節が適していると言える。

イタリア語訳が接続法であるがフランス語訳は接続法ではなく、イタリア語とフランス語で構文が異なるものの中では、イタリア語訳の主節がフランス語訳では現れないII. 2-a-iの例がいちばん多く、111回出現した。このカテゴリーのフランス語訳は、日本語原文のように２つの節をとらないため、日本語原文のモダリティを接続法で表すことはしていない。イタリア語訳では、接続法を使う主節—従属節という構文で、２つの節から成る日本語原文と構文を近づけ、意味もより原文に近づいている。日本語のモダリティは語末で表すことが多く、そこには事態についての様々なニュアンスが表れるが、イタリア語訳では、接続法をとる主節で対応させている。以下、II. 2-a-iのカテゴリーにあるイタリア語訳からいくつかの例を挙げておく。

～じゃないかな	« temo che ... »
～かもしれない	« può darsi che ... »
～はないでしょう	« non credo (che) ... »
～らしたの	« immagino (che) ... »
～のつもりだ	« penso che ... »
～なんです	« credo che ... »
～みたいね	« mi sembra che ... »
～気がする	« pare che ... »
～したりする	« capita che ... »
～わけじゃない	« non è che ... »
～してください	« voglio che ... »
～じゃないですかね	« non è detto che ... »
～というのでもない	« non si può dire che ... »
～というのでもないんだ	« non voglio dire che ... »
～じゃないかしら	« è probabile che ... »
～ようなことじゃない	« non è una cosa che ... »
～はどうでもいいです	« me ne infischio che ... »

このような対応は、フランス語訳では見られない。イタリア語はフランス語ほど接続法が有標ではないため、日本語を訳すときに、より自然に近い形で、訳すことができるのである。

3.2　日本語原文の情報を伝える接続法

日本語原文の節を節以外で訳そうとすると、原文にある情報をすべて伝えられなくなってしまうことがある。

(1) とくに印象的な風景だとも思わなかった。

fr) Il ne m'avait pas particulièrement impressionné.

it) *Non mi sembrava* che avesse niente di particolare.

(1)では、『ノルウェイ』の語り手である「僕」が登場人物の１人「直子」と、18 年前に一緒にいたときの草原の風景について、当時はどう思っていたかについて述べられている。日本語の原文は「とくに印象的な風景だ」と「とも思わなかった」の２つの節に分けられる。イタリア語訳の文も主節と補文節の２つの節から成るが、フランス語訳には、イタリア語訳の主節 « Non mi sembrava che » にあたる節がない。「とも思わなかった」という部分が、「～ではなかった」という単文の構造になっているが、代名詞 « me » によって、「僕には」という要素が加わり、「僕には～ではなかった」となり、「とも思わなかった」という意味内容を補っている。イタリア語訳は原文同様に複文であり、構文もより原文に近いが、意味内容も「とも思わなかった」に近いものとなっている。フランス語訳では他にも、単文構造をとることで、「とも思わなかった」、「ということだった」、「かもしれない」などの情報が省略され、補文節の主語もあいまいになる例が見受けられた。イタリア語訳ではどれも接続法の使用によって、モダリティや補文節の主語を正確に訳し、また２つの節を持つ原文を２つの節で訳すことで、文構造も原文に近づけている。

3. 3　日本語のリズムを再現する接続法

日本語原文の複文や２つ以上の文が、フランス語訳文では切れ目のない単文で訳されているが、イタリア語訳では接続法を用い、節の切れ目の « , » で、原文の「、」を再現している例がある。

(2) べつに嬉しかないわよ、お母さんが死んだことは。

fr) Je ne suis pas particulièrement contente de *la mort* de ma mère.

it) Ma non ne sono affatto felice, che mia madre sia morta.

『ノルウェイ』の登場人物「緑」が、夢で今は亡き母から「私が死んで嬉しいんだろう？」と訊かれたことを「僕」に語っているときの会話文である。イタリア語訳は「お母さんが死んだこと」が « che mia madre sia morta » と補文節で訳されていて、「死んだ」に接続法過去形 « sia morta » が使われているのは、主節が「嬉しかない」という感情表現だからである。フランス語訳では、「死んだこと」が名詞化され、「死」を意味する « la mort » で訳されている。イタリア語訳は、節で訳すことで、「お母さんが死んだ」という原文と同じ構文になり、補文節の前に « , » を置いて、原文の「、」も再現し、原文のリズムに近づけている。フランス語訳は単文で切れる場所がない。このように節の切れ目に « , » を入れて日本語原文の「、」を再現している箇所は、『ノルウェイ』だけでも３回見受けられた。

4. イタリア語の接続法の特質

日本語テキストのフランス語訳との比較におけるイタリア語の接続法から、接続法の使用によって、以下のことが可能であることが理解される。

・日本語のモダリティに対応させることができる。
・日本語原文の情報を余すところなく伝えることができる。
・日本語に文構造を近づけることができる。
・日本語原文の「、」を、節の切れ目の «,» で対応させて文の調子をより近づけることができる。

日本語のテキストを翻訳するときに、以上のことができる接続法を、イタリア語はフランス語と比べて、圧倒的に多く使っている。イタリア語においては、フランス語でもはや日常会話では使われることのなくなった接続法半過去は、今も日常会話でも使われ、主語を日本語と同様に省略することもできるので、節はフランス語ほど重くはならない。現代イタリア語において、接続法が生き続けているために、日本語のモダリティを、直説法以外の形式で翻訳することができるのである。

イタリア語ではフランス語に比べて接続法の使用がかなり多いことは理解されたが、ではフランス語においては、接続法を使用しないときには、どのように訳しているのであろうか。

5. 現代フランス語における接続法の回避

5.1 接続法半過去形の回避の方法

朝倉 (2002: 511) に、「接続法半過去回避の手段」として、以下の方法が挙げられている。

(i) 不定詞の使用.

Il faudrais que j'y allasse.「そこに行かねばなるまい」＞ Il faudrais [je devrais] y aller.

(ii) 接続法現在の使用：

Il a bien fallu que nous nous résignions.

「どうしても諦めなければならなかったのです」

Je voudrais que vous parliez avec mon mari.

「主人と話していただきたいのです」(résignassions, parlassiezを避ける)

また、Dauzat (1947: 185-186) には、（接続法半過去形の代わりに接続法現在形を使うことによる）「『時制の一致の規則』に対する違反を避けるために、現代の人々は巧みな方策をい、接続法半過去をまったく使わない」とあり、その「方策」として、以下を挙げている。

1° 従属節を分解し、不定法でおきかえる。

Il faudrais que j'y aille (ou allasse)「わたしはそこへ行かねばならないだろう」

のかわりに、

Il faudrais y aller「そこに行かねばならないだろう」を用いる。

2° 条件法を支配する接続詞に手だてを求める。たとえば quoique「～ではあるが」のかわりに quand même（同上意）を用いる。

3° 接続法を条件法でおきかえる。

ただしDauzatは、1°と2°は正しい方法ではあるが、2°は「思考のニュアンスを変えることになってしまう」とし、3°は、接続法現在の代用よりも「非難すべき用法であり、適切でない条件法の侵入」としている。Dauzatによれば、2°と3°は、接続法を回避するための有効な手段になるとは言い難い。

朝倉とDauzatによる接続法半過去の回避についてまとめると、次のようになる。接続法半過去形はフランス語においては避けられる傾向にあり、接続法現在形で代用されることが許容されている[3]が、それでは時制の一致の規則に違反してしまう。そこで、接続法半過去形を使わないようにするためには、接続法自体を避ければよい。それにはまずは、不定法にすることが考えられる。他にも、条件法を必要とする接続詞を使用する方法があるが、それではニュアンスを変えてしまうおそれがある。また、接続法半過去形を条件法で置き換えるのは、接続法現在に置き換えるよりも非難されるべきことである。

実際、フランス語における接続法半過去形の使用例は、本論文で挙げた３作品に出現するフランス語訳の接続法158回のうち、わずか６回だけの出現に過ぎず、三人称単数形の３種類のみ（« fût »３回、« existât »２回、« eût »１回）の使用であった。小説の２作品が、ほぼ過去形で書かれていることを考慮するならば、きわめて少ないと言わざるを得ない。

5. 2　接続法の回避の方法

Dauzatの述べた「巧みな方策」については、2°と3°が推奨されない以上、つまりは「従属節をとる構文を不定詞構文にする」ということについてのみの言及に過ぎない。

本論文で見てきたイタリア語訳では接続法になるがフランス語訳では接続法にならないケースで、イタリア語訳とフランス語訳では構文が異なるケースII. 2を観察すれば、フランス語において接続法が回避されるための「巧みな方策」を理解することができるであろう。それはもちろん不定詞構文を用いるだけではない。大きく分けても、II. 2のカテゴリーの６つの方法で、接続法を回避していると言うことができる。

II. 2-a-i **イタリア語訳の主節が、フランス語訳で現れない。**

副詞、人称代名詞、付加疑問などを加えたり、疑問形にしたり、条件法にしたりと、様々な工夫をして、接続法の主節部分が現れないような単文にする。

(3) 樹齢は少くとも百五十年ということだった。

3　Dauzat (1947: 185).「1900 年 7 月 31 日の文部省令が初めて、書類や試験において条件法の後の接続法現在を『許容』したのである。」

fr) Il était vieux d'au moins cent cinquante ans.

it) Si diceva che avesse almeno cento cinquanta anni.

『ノルウェイ』の主人公「僕」が住む寮にある「巨大なけやきの木」について述べられている。イタリア語訳では、「ということだった」という伝聞を意味する主節 « si diceva che» の後に、「樹齢は少くとも百五十年(だった)」の訳語 « avesse almeno cento cinquanta anni » が補文節として続き、伝聞で不確実な要素があるため補文節の動詞に接続法半過去形 « avesse » が使われている 。フランス語訳には、イタリア語訳の主節 « si diceva che » にあたる部分がなく、半過去形で「樹齢百五十年だった」ということが事実として提示されている。この木の樹齢が伝聞による情報であることを表さなくとも物語に何ら影響を及ぼすこともなく、「少くとも」の訳語 « au moins » が不確実さを既に表しているので、ここでは伝聞をイタリア語訳のように主節で示すことをしていない。

イタリア語訳の主節がフランス語訳で現れないケースは、フランス語訳では他の言いまわしを使ったり、付加疑問をつけたり、疑問文にしたり、条件法にしたりと、様々な要素を付加して、イタリア語訳が主節で訳している原文のニュアンスを出している。またイタリア語訳とは異なる原文の解釈を試みているケースもある。3. 1で見たように、このカテゴリーでのイタリア語訳は、接続法の主節でモダリティを表しているが、フランス語訳では、イタリア語訳の主節部分が現れないかわりに、様々な方法で日本語原文のモダリティを表している。

II. 2-a-ii **イタリア語訳の従属節が、フランス語訳では現れない。**

連体節を形容詞で表す。

(4) しかし答らしい答は見つからなかった。

fr) Mais je ne trouvais pas de réponse *satisfaisante*.

it) Ma non riuscivo a trovare niente *che assomigliasse a una risposta.*

『ノルウェイ』の語り手「僕」が「直子」からの電話を待ちながら「自分を見定めようとしてみた」ときのことを述べた地の文である。日本語原文の「答らしい」のイタリア語訳である接続法の関係節 « che assomigliasse a una risposta » 「答に似ている」で接続法半過去 « assomigliasse » が使われているのは、「見つからなかった」ことだからである。この関係節は、フランス語訳では節ではなく「満足できるような」を意味する形容詞 « satisfaisante » で訳されている。

従属節がフランス語訳で現れない例においては、(4)のようにイタリア語訳での連体節がフランス語では形容詞で訳されていて、節として現れないケースがほとんどであった。(4)をイタリア語訳に倣って節を用いて訳していたとしたら、「見つからなかった」ものであるから、「答えらしい」の訳の節は接続法になる。つまり節で訳したなら接続法となるような連体節を形容詞で訳すことで、接続法の使用を免れているのである。

II. 2-b **フランス語訳で不定詞構文になる。**

補文節を不定詞に置き換えて、節にしない。

(5) ダメだよ。そういうこと言っちゃ。

fr) Il ne faut pas *dire* des choses pareilles.

it) Non va mica bene che tu dica cose del genere.

『東京ノート』で、学生時代に家庭教師をしていた男性が、元教え子で今は大学生の女性に偶然出会って、「あのあとね、こどもできたんですよ。うっそ」と言われて、返した言葉である。イタリア語訳では、「ダメだよ」の訳語 « non va mica bene » という主観的意見を述べる主節の補文節に「言う」の二人称単数の接続法現在 « dica » が使われている。フランス語訳では、「～べきではない」という意味の非人称構文 « il ne faut pas » に「言う」の不定詞 « dire » が使われていて、「そのようなことは言うべきではない」という意味になる。イタリア語訳は、補文節が現れることで、「君がそのようなことを言うことはダメだ」という意味になり、フランス語訳とは、少しニュアンスが違っている。日本語は二人称の主語は言わなくてもよいので、原文はどちらの意味とも取れる。

不定詞構文では、主語が明示されない場合もあり、文脈からの判断にゆだねたり、主語があいまいになったりすることもあるが、このカテゴリーのフランス語訳では、(5)のように補文節をとらなくても日本語原文の情報をきちんと伝えていて、朝倉やDauzatが言うように、接続法を回避する方策として有効と言える。接続法を避けるために不定詞構文にするというのは、外国人向けのフランス語の教科書で言及されることも多く、一般的に接続法を回避するために最初に試みられる方策であるとされている。

II. 2-c **フランス語訳で動詞が名詞化される。**

従属節の接続法の動詞を名詞化して、節を名詞句にする。

(6) 教師が来るまで直子への手紙を書くことにした。

fr) (Je) décidai d'écrire une lettre à Naoko en attendant *l'arrivée* du professeur.

it) In attesa che venisse il professore mi misi a scrivere una lettera a Naoko.

大学での授業を待つ『ノルウェイ』の主人公「僕」の教室での様子である。「教師が来るまで」のイタリア語訳は、「～を待っている間に」 « in attesa che » に「教師が来る」 « venisse il professore »とつなげ、「直子への手紙を書くことにした」の « mi misi a scrivere una lettra a Naoko » という訳になっている。「来る」を意味する動詞 venire の三人称単数の接続法半過去形 « venisse » が使われているのは、「教師が来る」のはこのときは不確定だからであり、時制が半過去なのは「手紙を書くことにした」の「～することにした」の訳 mettersi の一人称単数直説法遠過去形 « mi misi » との時制の一致からである。フランス語訳は、まず「直子への手紙を書くことにした」の « je décidai d'écrire une lettre à Naoko » から始めて、「～を待ちながら」を意味するジェロンディフ « en attendant » の次に「教師の到着」« l'arrivée du professeur » が用い

られている。

イタリア語訳の従属節の接続法の動詞が、フランス語訳では名詞化されているケースである。フランスでは伝統的に国語教育において名詞化を練習させるほど、名詞化は重要視されており、動詞を使う節よりも動詞を名詞化して句にするほうが、より明晰な文章になると考えられている。一方イタリア語訳では名詞化される例は現れない（表１、III. 2-c参照）。

II. 2-d フランス語訳で分詞を用いた構文になる。

従属節を現在分詞、過去分詞、ジェロンディフに置き換える。

(7) 彼女は作動している途中で電源を抜かれてしまった機械みたいに見えた。

fr) Elle ressemblait à une machine *stoppée* en plein mouvement.

it) Sembrava un motore a cui <u>fosse staccata</u> la corrente mentre era in piena attività.

『ノルウェイ』の登場人物「直子」が「四時間以上ノンストップでしゃべりつづけていた」後の様子が描写されている。イタリア語訳は「機械みたいに見えた」« sembrava un motore » に「前置詞 a＋関係代名詞 cui」が続き、「電源を抜かれてしまった」を意味する形容詞節 « fosse staccata la corrente » (「電源」« la corrente » が節の中の主語であり、« fosse staccata a ... » が「～から抜かれた」を意味し、« a » の後にくる「機械」« un motore » が先行詞に「前置詞 a ＋ 関係代名詞 cui 」で繋がれている)で、「途中で電源を抜かれてしまった機械」となっている。実際にこの機械は存在していないので、« fosse staccata » は接続法半過去になっている。フランス語訳は、「彼女は～のように見えた」を意味する « elle ressemblait à ... » の後に、「止まった機械」という意味の « une machine stoppée » が続き、「止まった機械のように見えた」となり、「止まった」を意味する過去分詞 « stoppée » が「電源を抜かれてしまった」の訳語になっている。この « stoppée » は、関係節 « qui fût stoppée » と同じ意味を持つ[4]。

フランス語訳で分詞を伴う構文になり、接続法にならないケースでは、(7)のように過去分詞を伴う構文の他に、現在分詞を伴う構文、あるいはジェロンディフになる場合がある。このカテゴリーのフランス語の文は、分詞を使わずに関係節に書き換えれば、接続法になる。イタリア語では、分詞構文を関係詞節の代わりに使うことは少なく、フランス語で接続法だがイタリア語で接続法にならないケース（III. 2）では、分詞を使う構文にする例は現れない。フランス語では分詞を伴う構文が多彩であり、関係節の代わりとして使われるのである。

II. 2-e フランス語訳で重文、または二つ以上の文になる。

複文を « et »、« , » で分ける重文にする。あるいは « . » で二つ以上の文に分ける。

(8) あなたはただそれを読みとるだけでいいの。

fr) Tu les lis, c'est suffisant.

it) Basta che lo <u>legga</u>.

---

4 朝倉季雄 (2002: 361). 「〔過去分詞〕IV. 用法 ②関係節に相当：Je cherche un appartement bien exposé au soleil. (= qui soit bien exposé) 日当たりのよい部屋を探している」

『世界の終り』で、「一角獣の頭骨」から読みとったものをどうしたらいいのか、という主人公「私」からの問に対して、図書館の女性が答えた会話文である。イタリア語訳は「～するだけでよい」という意味の非人称構文 « basta che ＋ 接続法 » の構文で、補文節には接続法現在 « legga » が使われている。フランス語訳は、「君がそれを読みとる」« tu les lis » という文と、「それで十分だ」 « c'est suffisant » という文の、２つの文が « , » で繋がれている重文構造になっているが、ここは初めの文が命令文ととれるので、「それを読み取れば、それで十分だ」という意味になる。直説法現在形という最も頻繁に会話文で使う動詞を用いた文を２つ並べることで、話し言葉の感じも出ている。イタリア語訳は、この文を見ただけでは地の文か会話文かはわからないが、フランス語は会話文とすぐに理解されるような訳になっている。

ここでとりあげた、イタリア語訳が接続法をとる複文であるのにフランス語訳が重文であるケースは、日本語原文が並置した重文のようにもとれたり、フランス語訳文が重文構造であるものの命令文の仮定的用法にとれるようなケースであった。このように「どちらともとれる」ケースで、重文構造をとることで、フランス語訳では接続法が現れなくなっている。

表２　構文による接続法の出現数

	構文同じ	構文異なる	計
Ⅰ　仏(接)∧伊(接)	162	26	188
Ⅱ　仏(－)∧伊(接)	276	317	593
Ⅲ　仏(接)∧伊(－)	2	61	63
計	440	404	844

II. 2のカテゴリーは、表２におけるフランス語訳が接続法にならずイタリア語訳が接続法になり、フランス語訳とイタリア語訳では構文が異なるケースである。このカテゴリーの317回の出現は、最も多い。フランス語が接続法にならずイタリア語が接続法であるケースは593回（全体の79％）であり、この中でもフランス語では同じ構文でも直説法や条件法にとって代わられたケースの出現が276回であるが、それよりも多い317回、Dauzatの言葉を借りれば、「巧みな方策」で接続法を回避しているのである。

6.　結論

イタリア語との比較におけるフランス語の接続法の考察により、フランス語の接続法の回避の仕方がより詳細に理解された。現代フランス語において、接続法を回避しようとする理由としては、接続法半過去形の衰退[5]の他にも、qui や que を使う関係詞節を「重苦しい」とする傾向などが挙げられる。例えば、Charles Bally は、フランス語としてふさわしくない、小学生

5　Bruno (1926: 784). 1919 年 5 月にパリで施行された初等教員資格試験に出された「offrir の接続法半過去形の変化」の成績があるが、44 名の受験者に正解者は 1 人もいなかった。

の重苦しい文章として、次の例を挙げている。

Ils cédèrent parce qu'on leur promit formellement qu'ils ne seraient pas punis.
（彼らは罰せられないことを正式に約束されたので譲歩した。）

そして、「フランス語の文章」として、事態を実体として表示することのできる名詞化を推奨し、次の例を挙げている。

Ils cédèrent à une promesse formelle d'impunité.
（彼らは無処罰の正式な約束で譲歩した。）

節を３つ持つ「小学生の文章」から、「フランス語の文章」にするために、節を名詞化で統合するという手法は、接続法回避のための方策とまさに同じである。節が現れなくなるというのは、IIのカテゴリー全般に言えることであるし、名詞化はII. 2-cと一致する。

接続法半過去形は、現代フランス語の話し言葉で使われることはないので、避けようとする傾向はたしかに強い。しかし、IIのカテゴリーのフランス語の例文を観察すれば、「巧みな方策」で接続法を避けていると言うよりは、すっきりとした「重苦しくない」文章にしているとも言うことができる。

フランス語が接続法でイタリア語が接続法でないIIIのカテゴリーにおいては、分詞を使った構文と、名詞化の例が現れない。イタリア語では、分詞構文が関係節の代わりになることは極めて稀であり、フランス語とは逆に、レトリックの散りばめられた長い文章の方が格調高いとする傾向もあるので、フランス語のように名詞化することに重きが置かれることもなく、接続法半過去形の使用はむしろ推奨される。

フランス語においては、イタリア語と比べれば、接続法の使用は避けられてはいるが、分詞構文や名詞化など、多彩な構文によって接続法を避けることで、より美文になることもある。

とはいえ接続法は、主観的な判断の様々な表現のニュアンスを可能にし、非現実的世界を自由に行き来させながら、私たちの思考をも豊かにすることのできる法である。そのことで、日本語の文学作品の訳をより原文に近づけて行うこともできる。

ロマンス諸語においては、イタリア語ですら、接続法の使用は減少の一途をたどっている。「滅びつつある法[6]」と言われている接続法について、最後に、接続法半過去（fût）であるべきところが接続法現在（soit）で書かれているネルヴァルの文で締めくくりたい。

Nous avons voulu voir en détail le domaine avant qu'il ne <u>soit</u> restauré.
（我々はその領域が復活する前に詳細に見ておきたかったのだ。）
— Gérard de Nerval (1855) *La Bohème galante*: p. 84. Paris: Michel Lévy frères.

6 Posner, Rebecca (1966) *The Romance Languages : a linguistic introduction*. Gloucester: Mass., Peter Smith. 風間喜代三、長神悟訳（1982）『ロマンス語入門』: 220. 東京：大修館書店.

参考文献

Bally, Charles (1963) *Linguistique générale et linguistique française*. Bern: Francke.

Bruni, Francesco (2007) *L'italiano letterario nella storia*. Bologna: il Mulino.

Bruno, Ferdinand (1926) *La Pensée et la langue: methode, principes et plan d'une théorie nouvelle du language appliquée au français*. Paris: Masson.

Cohen, Marcel (1965) *Le subjonctif en français contemporain.* Paris: Société d'édition d'enseignement supérieur.

Dauzat, Albert (1947) *Le Génie de la langue française.* Paris: Payot.

Posner, Rebecca (1966) *The Romance Languages: a linguistic introduction*. Gloucester: Mass., Peter Smith. 風間喜代三、長神悟訳（1982）『ロマンス語入門』東京：大修館書店.

Von Wartburg, Walther (1962) *Évolution et structure de la langue française*. Bern: Francke.

朝倉季雄 (2002) 木下光一（校閲）『新フランス文法事典』東京：白水社.

佐藤房吉 (1970)『現代フランス語接続法—その法的価値に関する理論的研究—』東京：第三書房.

A Comparison of Subjunctives Between Modern French and Modern Italian:

Characteristics of Subjunctives in the Italian Language and its Avoidance in the French Language

Sano, Yuka

vitarosea@gmail.com

Keywords: French, Italian, subjunctive, imperfect subjunctive, subordinate clause, stylistics

Abstract

It is known that there is a substantial difference between Modern French and Modern Italian in the context where the subjunctive is used. The question is how to verify this. In this study, a comparison was conducted between the French and Italian translations of the literary works of Japanese— a language that does not have the subjunctive as a morphological category. The number of occurrences of subjunctives were counted, with classification by the type of construction. Special focus was given to cases where the subjunctive is used in the Italian translation while the French version does not have it, in order to explain the characteristics of the subjunctive in Italian and strategies to avoid it in French.

（さの・ゆか　東京大学大学院）